

お知らせ

ジョゼフ・アプト・アマディ 神学生の助祭叙階式が 行われました

2025年5月24日、サレジオ家族の保護者である扶助者聖マリアの祭日に、東京・調布のサレジオ神学院でジョゼフ・アプト・アマディ神学生が助祭叙階の恵みをいただきました。司式はサレジオ会員でさいたま教区長のマリオ山野内倫昭司教。当日はケニアからお母様、ケニア管区長のジョージ神父と管区財務のチェゲ神父、フィリピンの神学院からトマス神父と友人の司祭が駆けつけ、日本管区のメンバーと一緒に喜びを分かち合ってくださいました。式の最後に、アプト助祭は日本語、英語、スワヒリ語の3か国語で感謝の挨拶をして、宣教師として来日してからの8年を振り返っていました。助祭としてあと1年、フィリピンで勉強と実習を続けます。皆様のお祈りでの応援をお願いします。



ジョゼフ・アプト・アマディ神学生の助祭叙階式の様子。調布サレジオ神学院聖堂にて

100周年記念テーマソングを みんなで歌おう！

サレジオ会来日100周年にあたり、テーマソング「夢を紡いで」を発表しました。下記サイトから楽譜も音源も、伴奏音源（メロディー付も有）も入手可能。作曲はサレジオ学院26期生でプロミュージシャンの立石一海さん。大人も子どもも一度聞けば、口ずさみたくなる素敵な歌です。これまでに日向学院の合唱部や碑文谷教会の有志が演奏動画をアップしてくれています。皆さんも有志を募って一緒に歌ってみた動画を共有してみましょう！ ドン・ボスコの風インスタグラムや日本管区サイト問い合わせメールに動画のURLをお知らせください。お待ちしております！

サレジオ会来日100周年テーマソング
「夢を紡いで」プロモーションページ
<https://salesio.jp/gia-100th/themesong>



調布サレジオ神学院の神学生とイエスのカリタス修道女会シスターたちによる演奏の様子

サレジオ会来日100周年に関する情報はこちら



100周年記念
アーカイブサイト

<http://www.oratorio.tokyo/>



ドン・ボスコの風
インスタグラム

<https://www.instagram.com/dbnokaze/>



ドン・ボスコの風 アヴァンティ no.3

2025年10月6日発行

編集人 岡本 大二郎
発行人 濱崎 敦
発行所 サレジオ会日本管区本部
「ドン・ボスコの風」編集事務局
〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12
電話:03-3351-7041 Fax:03-3341-5429
Eメール: dbw@salesians.jp
編集・デザイン制作 ドン・ボスコ社
印刷所 株式会社プリントパック

本誌掲載の記事、写真、イラストの無断転載を禁じます。
© サレジオ会日本管区本部 2025

「ドン・ボスコの風」について ――

「ドン・ボスコの風」はサレジオ会創立者ドン・ボスコが1877年に創刊した“Bollettino Salesiano”の日本版。サレジオに関わる人びとの生き方や活動を紹介し、サレジオ家族の絆を深めるサレジオ会広報誌です。

note版「ドン・ボスコの風」https://note.com/db_no_kaze

サレジオ会日本管区が管理人を務めるサレジオ家族のウェブ版オラトリオ（学び舎）です。若者と、共に歩むすべての人が、学び・つながる場として、皆さんと一緒に作っていく発信スペースです。サレジオ家族の様々な人や場所、事柄を随時紹介しています。



Salesian Bulletin Japan

ドン・ボスコの風



Avanti

アヴァンティ

no.3
2025.10

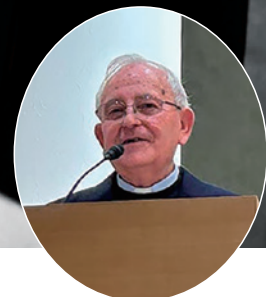


サレジオ会宣教師派遣150周年

特集

チマッティ神父 帰天60周年

1956年（77歳）頃、調布サレジオ修学院にて



巻頭言

宣教師チマッティ神父の姿

チマッティ資料館館長
ジョヴァンニ・マルシリオ神父

チマッティ神父は、普段は自分のことを「サレジオ会司祭」と名乗っていましたが、特別なときには「サレジオ会宣教師」と紹介していました。来日前、イタリアで音楽や科学、教育学の学位を取りながらも、彼の心にあったのはただ一つ、「宣教師として神の栄光と人びとの救いのために働く」という望みでした。

46歳のとき、ついに宣教師として日本に派遣されます。出発にあたり、リナルディ総会長から「日本へはイタリアの知識や文化ではなく、キリストの愛を届けなさい」と励ましの言葉を受けました。日本への長い船旅の間、「日本語もまともに分ならず、どうやって日本で宣教するのか」と問われると、「神が導いてくださる。まずは聖フランシスコ・サレジオの優しさとドン・ボスコの宣教熱で始めたい」と答えたといひます。

宮崎や大分での働きを通して、日本語や日本の習慣を身につけ、人びとを友とし、祈り働くことを大切にしました。やがて彼は「私の心は日本人の心です」と手紙に書き残しています。宣教に欠かせないのは、知識ではなくキリストの愛であることを、彼は身をもって示したのです。

サレジオ会宣教150周年にあたり、チマッティ神父を始めとする宣教師たちの日本への愛と熱意を、感謝とともに私たちの間にも呼び起こしたいものです。



サレジオ会来日100周年

記念期間：2025年2月8日～2026年2月8日

チマッティ神父 人柄と生涯について

ドン・ボスコとの出会い

1879年、イタリア中部ファエンツァ郊外の貧しくも温かい家庭に生まれた彼は、信仰篤い両親に育てられ、2歳の時にドン・ボスコに出会います。彼の母親は幼い息子にドン・ボスコを一目見せようとわが子を高く差し上げてこう叫びます。「ヴィンチェンツォ、ドン・ボスコをごらん」。この言葉は彼の心に深く刻まれました。

3歳の時に父を亡くした後、サレジオ会のオラトリオ（教会学校）に兄ルイジとともに通うようになり、9歳になると兄の後を追ってサレジオ会の学校の寮に入り、そこで7年を過ごします。背は低かったのですが、成績優秀、足も速く、演劇、聖歌隊でも皆の注目を浴びる存在でした。しかしそれに浮かれる素振りは見せなかったと言われています。

ある時、南米から帰国した宣教師の話を聞いて、いつかは遠く貧しい宣教地に行きたいと考えるようになりました。ドン・ボスコの精神を学んだヴィンチェンツォ少年は、導かれるように17歳の時、生涯を神にささげる誓いを立て、サレジオ会へ入会しました。

多才な司祭

サレジオ会員となった彼は、トリノのヴァルサリチェ学院の高等学校を卒業し、実地課程ではヴァルサリチェ学院で教師をしながら、国立トリノ大学で自然科学と哲学・教育の学位、国立パルマ音楽院で「コーラスのマエストロ」のディプロマ（免許状）を取得します。神学の勉強も並行して行い、1905年25歳で司祭に叙階されました。その後、46歳までヴァルサリチェ学院で校長も務め、忙しい日々を過ごしたのです。親しみやすさと対話の姿勢によって生徒や会員から慕われました。

多忙の中で記された著作『教育者ドン・ボスコ』には、予防教育法の伝統にしっかりと根差しつつ、自然科学や同時代の文化とも対話しようとする開かれた態度が見られます。また、当時サレジオ会の中で語られることの



1957年9月22日、下井草教会で祝った聖ドメニコ・サヴィオ帰天100周年

少なかった女性への教育や性教育にも触れている点も注目されます。

宣教への熱い思い

イタリアでの充実した環境の中でも、宣教への熱意は消えていませんでした。当時のサレジオ会総長、リナルディ神父へ宛てた手紙でこう語っています。「……私が赴く宣教地として、より貧しく、より苦勞の多い、より見捨てられた場所を見つけてください。どうも居心地のよい場所は私には合わないのです。どうか、今度こそ、願いをお聞き入れください」。

手紙が送られた同じ頃、ローマ教皇からの命を受けたサレジオ会は、宣教師派遣50周年記念事業として日本へ宣教師を派遣することを決定。1925年12月29日、チマッティ神父を団長とする宣教師団はフルダ号に乗り、イタリア・ジェノヴァ港から日本へ向けて出発したのです。46歳の時です。

日本の土になりたい

チマッティ神父が宣教において苦勞したのは日本語の習得でした。それに加え戦前・戦中・戦後のとても困難な時代に慣れない土地での苦勞は計り知れません。彼は他の宣教師たち、日本で育てた教え子たちとともに、日本の人びと、特に青少年のために出版をし、学校を建て、様々な事業に心血を注ぎました。チマッティ神父は、「日本の人びとを愛すれば愛するほど、あらゆる面で彼らに似てくるはず」「私たち宣教師の心が日本的な心にならなければ、日本の人びとを回心させることはできない」と確信をもって記しています。病床での「日本の土になりたい」という言葉が示す通り、すべてを日本にささげた宣教師でした。

チマッティ神父の働きは今も、その精神を受け継いだ日本のサレジオ家族によって継続しています。困難な状況の中でもドン・ボスコの精神を生き抜く姿を示し

たチマッティ神父は、今、「ドン・ボスコをごらんさい」と言いながら私たちを見守っています。

ドン・ボスコの風 No.13（2014年7月発行）より再編

ヴィンチェンツォ・チマッティ CIMATTI Vincenzo

サレジオ会司祭。1879年7月15日イタリア・ファエンツァ生まれ。1926年に日本への初代サレジオ会宣教師団の団長として来日し、多くの日本人司祭・修道者を育成。音楽家としても900曲以上も作曲している。1965年10月6日、86歳で帰天。

チマッティ資料館サイト チマッティ神父ってどんな方
<https://www.v-cimatti.com/cimatti/cimatti.html>



1956年、調布サレジオユース・センターの子どもたちと



1952年頃の調布サレジオ修学院落成式

● 歴史と文化の町・調布

チマッティ神父が晩年を過ごしたサレジオ修学院（現・神学院本館）は、東京都調布市にあります。調布は古くから人びとが暮らしていた土地で、多くの遺跡が発見されています。江戸時代には甲州街道（現・国道20号）の宿場町として栄えました。

戦前に開通していた京王電気軌道（現・京王電鉄）により、東京中心部へのアクセスが便利になり、1955年の日活多摩川撮影所（現・角川大映スタジオ）の建設を契機に宅地開発が急速に進みます。その後、調布町と神代町が合併して調布市が誕生し、「映画のまち」としても広く知られるようになりました。

市の南側には多摩川が流れ、北側には奈良時代の733年に創建された古刹・深大寺と、緑豊かな神代植物公園が広がっています。深大寺そばは特に名物として人気です。修学院の近くには由緒ある布多天神社があり、調布市の名誉市民・水木しげる氏の代表作『ゲゲゲの鬼太郎』の舞台としても知られています。旧甲州街道から布多天神社へ続く参道は、現在「天神通り商店街」としてにぎわい、妖怪のキャラクター像が並ぶ観光スポットになっています。

● 戦後の修学院移転と歩み

調布サレジオ修学院は、1951年に練馬（現在の下井草）から移転・新築されました。計画を指揮したウルデリコ・ロマーニ神父の記録によれば、土地の元所有者はヤマハ楽器株式会社、建築は清水建設によるものでした。当時は北多摩郡調布町に属し、周辺は農地や雑木林の広がる自然豊かな農村地帯でした。近くには東京調布飛行場があり、戦時中は軍事利用され、戦後は軍需工場跡地や復興住宅が点在していました。布多天神社や調布駅周辺では復興市場が開かれ、戦災の大きかった都心から移り住んだ人びとでにぎわいました。

修学院は1952年に正式に落成し、初代院長にはチマッティ神父が就任しました。その後、敷地内にカトリック調布教会が設立され、周辺にもカトリック修道院やキリスト教系の学校・施設が徐々に増えていきました。当時の修学院の建物は修理・改築を重ねながら、76年を経た今も神学院として使われ続けています。

また、チマッティ神父の帰天後には敷地内に「チマッティ資料館」が建てられ、彼にゆかりのある貴重な資料が一般公開されています。